

「甲子園野球」についての教育学的考察 ～高校野球に蔓延する勝利至上主義～

A pedagogical study of “Koshien-Yakyu” ～Victory supremacy spreads over high school baseball～

1K05B168

指導教員

主査 友添秀則先生

奈良 匡平

副査 木村和彦先生

【研究の動機】

2007 年 3 月に発覚した、プロ野球・西武ライオンズによる早稲田大学野球部の部員への金銭受け渡しの問題に端を発した高校野球における特待生問題は、日本の野球界全体を揺るがす社会問題にまで発展した。同年 10 月に開かれた高校野球特待生有識者会議の答申を受けて、特待生制度は暫定的に条件付きで認められるかたちとなり、事態は一応の沈静化を見せている。しかし、当面の間は、日本高等学校野球連盟（以下「高野連」と表記）が、最終的な方針を策定する猶予期間にあるといえる。高野連には厳然たる対処を期待したい。

しかし、現代の高校野球において、いまだに勝利至上主義から派生する人身売買にも陥りかねない選手獲得の問題が払拭されたわけではない。こういった問題は、高校球児を拝金主義に陥れる危険性を孕んでいる。したがって、いま一度この問題について振り返り、検討する必要があると考える。

本来、学校教育の一環としてあるはずの高校野球。しかし、そこに蔓延する勝利至上主義。そのため、現代の高校野球は、課外活動である運動部活動としての教育的な機能が果たされない危険性を孕んでいる。

本研究では、高校野球に深く根付いている勝利至上主義と向き合い、そこから生まれる選手獲得問題に対しての解決に繋がる提言を行い、運動部活動としてのあるべき姿について検討したい。

【研究の目的】

本研究の目的は、以下の 3 点である。

1. 明治時代における野球伝来直後の学生野球から現代の高校野球に蔓延していった勝利至上主義の動向について明らかにする。
2. 2007 年 3 月以降、論議されている特待生問題について、経緯と問題点を明らかにし、考察と提言を行う。
3. 高校野球が「教育の一環」として存在するためには、どのように扱われるべきかを明らかにする。

【研究の方法】

本研究は関連文献の講読によって行う。

【各章の概要】

第1章 一高野球と勝利至上主義

現代の高校野球には勝利至上主義が蔓延している。そのイデオロギーは、如何にして生まれたのであろうか。明治時代における日本で、野球の伝来以降、どのような「野球観」が作り上げられてきたのか。

第一高等学校が築きあげた「一高式野球」、「野球害毒論争」、私学野球の台頭で扱われた野球観は、それぞれどのようなものであったのだろうか。それぞれの野球観について検討し、勝利至上主義の原点に迫る。

第2章 甲子園野球と勝利至上主義

何故、高校球児は「甲子園」を目指すのか、何故、勝ちにこだわるのか。高校球児の聖地「甲子園」が、どのような変遷を辿って、どのように国民的イベントへと発展していったのか。マスメディア

イベントとして創出された「甲子園」と、それを生み出したメディアの関係性を検討し、甲子園野球の歴史とその発展の様子から、現代の高校野球における「甲子園」が持つ社会的権威のルーツを探る。

第3章 現代の高校野球と勝利至上主義

2007 年 3 月に発覚した「特待生問題」を中心に、現代の高校野球に蔓延する勝利至上主義について考察を行う。高野連は、「高校野球は教育の一環」と謳う一方で、「特待生制度」が「高校野球ビジネス」の道具と化してしまっている現状を黙認してきたといえる。その根底には、学校、生

徒、親、高野連、メディアなど思惑が渦を巻いている。これからの高校球児にとって必要なことは何か、という観点から教育学的な考察を行い、現代の高校野球が抱える「特待生問題」についての提言を行う。

結章 今後の高校野球のあるべき姿

本章では、第1章から第3章までの総括を行い、健全で教育的な高校野球のための提言を行う。「特待生制度」との正しい付き合い方を模索し、今後の高校野球のあるべき姿について考察する。